

## 研究炉に託す原子力の夢と希望

伊藤 哲夫

*Itoh Tetsuo*

(近畿大学原子力研究所所長)



東京電力(株)福島第一原子力発電所事故から4年半以上が過ぎ、まだまだ多くの危惧すべき課題を抱え、解決への模索を続けており、希望の持てる事故収束への道のりは厳しいものがある。未曾有の事故とはいえ、長期にわたり厳しい状況下にある現状を省みて、我々はまだまだ技術の未熟さを感じる場所である。この状況を打破するには、多くの優秀な技術者の知恵と協力が必要である。

福島県下では、汚染された地域の除染活動が遅ればせながらも進み、ようやく避難解除への動きも始始め、復興への大きな1歩となっている。

原子力平和利用が本格化して半世紀余り、我が国における研究炉は、原子力・放射線関係の研究・開発、人材育成、研究者・学生の教育・研究、さらに産業・医学への応用にも供され、国民の生活向上に深く浸透した重要な基盤施設となった。科学立国日本は、今こそ、この基盤施設を活用し、これまで経験してきた様々な事例、事故等を検証し、世界に積極的に発信し、引き続き世界の原子力分野の安全と発展に寄与できればと願う次第である。

今、原子力分野は、夢のないネガティブな課題が多く、学生の原子力離れが顕著に起きている。国や大学は、技術発展と技術継承のため、原子力人材育成を進めており、様々な形で原子力人材の確保及び育成のための事業を積極的に実施し、原子力を志す学生の確保と育成に努力している。

近畿大学における人材育成は、原子力を志した学生が原子炉運転を通じて原子炉特性を直に緊張して体験できる実学教育の場を学内外の多くの学部学生に提供し、1人でも多くの学生が原子力分野に興味を持ち続けてもらえればと考え、“原子炉運転実習”を実施してきた。また、将来原子力を学ぶ子供たちを確保することも重要であるとの考えから、初等教育に携わる小学・中学・高等学校教員を対象に“小・中・高等学校教員のための原子炉研修会”を実施してきた。

なお、我が国には、それぞれの役割を持った研究炉が14基あり、その内大学炉としては京都大学と近畿大学の2施設で、それぞれの特徴を生かし、研究者・学生の研究、原子力人材育成及び原子炉運転・実験研修会等の原子力理解活動等に利用されている。緊張を持って受けた原子炉運転実習や研究こそ、一生忘れない身に付いた教育・研究と考える。

現在、研究炉は新規制基準の適合審査の対象となっており、全ての研究炉が1年以上停止しており、再稼動の見通しが立っていない。研究原子炉の長期停止は、研究者や技術者の原子力離れを引き起こすのではないかと懸念や原子力人材育成への影響などが心配されており、原子力に携わる者だけでなく国も危惧している。

我が国の研究炉は、老朽化も進んでおり、国の確固たる政策と支援の下、新たな引継炉も念頭に、研究炉の安定運転を継続し、オール日本で夢と希望が持てる原子力産業の発展のため、研究・教育の充実が望まれる。